

# 公立進学高校における授業時間配分と教師の認識構造 —東北地方 Y 高校を事例として—

富田 知世 (東京大学大学院・学術振興会特別研究員 DC)

## 1. 問題設定

本研究は、東北地方に所在する公立進学高校 Y 高校を事例とし、教師の認識構造というミクロレベルの視点から組織構造の形成メカニズムを解明することを目的とする。具体的には組織構造の一側面である授業時間配分が、教師がいかなる認識構造に基づき決定されているのかを明らかにする。

本研究が題材とする授業時間配分の形成メカニズムの解明を試みる研究として代表的なものに荒牧・山村(2006)がある。高校の授業時間配分(教育課程編成)に大学入試科目が影響を与えることは既に知られていることだが、荒牧・山村は大学入試以外の要因についても網羅的に検討している。そこで挙げられている要因は、教育行政、生徒・保護者、地域社会の構造・風土・歴史等、学校組織内部における諸条件、教育経営方針という諸要因である。しかしながら、荒牧・山村の研究は各要因がどのように、そしてどの程度各学校において影響を与えているのか、その編成原理を明らかにしてはいない。

本研究は授業時間配分という組織構造の一側面に限定したうえで、組織構造の形成メカニズムに対してミクロレベル、すなわち教師の認識構造から迫るものである。また、教師の認識構造を捉えるにあたり、総合的な学習の時間、および探究学習の導入に関する認識を切り口とする。2013年度学習指導要領では、総合的な学習の時間を1週間の時間割に位置づけることや、探究学習を実施することが提唱されている。総合的な学習の時間の充実を要請する政策側からの圧力は増している。総合的な学習の時間および探究学習の導入に関する認識を切り口にするすることで、既存の授業時間配分に込められた教師の認識が顕在化するだろう。

とりわけ、総合的な学習の時間の実施に困難を覚えやすい進学高校(西尾他2001など)で、かつ学校外教育機会が相対的に少なく学校が有する時間の価値が大きいと思われる地方の公立高校を対象とすることで、その認識が現われやすくなるだろう。

## 2. 調査の概要

調査校は東北地方に所在する公立進学高校 Y 高校で、男子校である。普通科と理数科を持つ。卒業生の進路は地元国立大学のほか、東北大学などを中心に難関国立私立大学に進学する者が数多くいる。ただし、分析結果でも示すが、Y 高校教師は、同学区には Y 高校以上に進学実績を挙げている「トップ」校があり、Y 高校は当該高校に次ぐ進学高校であると自認している。なお、「トップ」校とされる高校を事例とした授業時間配分を巡る教師の認識構造については、富田(2014)で既に検証している。

本発表で使用するデータは2013年9月・12月に実施した調査で得られたデータである。9月調査では管理職、教務主任や学年主任など要職につく教師、Y 高校に長期間勤務している教師など8名にインタビュー(ICレコーダーに録音、半構造化インタビュー)を行った。12月調査では国語・数学・英語・理科・地歴公民(社会)の教科主任5名に対してインタビュー調査(ICレコーダーに録音、半構造化インタビュー、ただし1名はICレコーダーに録音なし)を行った。9月訪問時に、教育課程表などの資料収集も実施した。

9月のインタビューでは、Y 高校における総合的な学習の時間の概要や、その学習で期待されること、また課題と思われることなどを幅広く質問した。12月のインタビューでは、総合的な学習の時間と教科学習

とのつながりや、教科学習指導の状況など、総合的な学習の時間以外のY高校の教育活動の特徴について詳細に質問している。

### 3. 結果の概要

初めに、Y高校における総合的な学習の時間の取り扱いについて説明する。Y高校では、2013年度施行学習指導要領が提唱する通り、総合的な学習の時間を1週間の時間割内に設定していた。その結果、普通科においては総授業時間数を1コマ増やすことになった。しかし、そのような変更がY高校において容易なことではなかったとの認識を、管理職の教師、教務主任の教師のインタビューより知ることができた。それゆえ、時間と労力が膨大に費やされる探究学習については回避されていた（探究学習が選択されなかった経緯の詳細は当日示す）。総合的な学習の時間には最小限の時間しか割けないとY高校教師は認識していた。そのことは、Y高校が総合的な学習の時間導入以前に確立してきた既存の授業時間配分が教師たちの認識においては優勢であることを示している。では、Y高校の授業時間配分は教師たちのどのような認識に基づき決定されているのだろうか。

分析の結果Y高校教師たちは、授業時間配分において、学習指導要領の必履修・選択必履修科目の標準単位数を下回らないことを前提に、①大学入試教科・科目へ優先的に時間を配分すべき、②大学入試教科・科目の国語・数学・英語の中でも数学に潤沢な時間を配分、国語は節約的に時間を配分すべき、③放課後の時間については部活動へ優先的に時間を配分すべき、という3つの認識構造を有していると判断できた。

①については、総合的な学習の時間は大学入試に直接関連がないという認識を教師が持っていたことから判断できる。加えて、インタビューからは、Y高校教師が有する学力観が「大学入試に合格できる力」であったことから①の認識構造の存在が支持される。続いて、大学入試教科・科目の中でどのように授業時間配分をすべきかについては②のような認識を有しているが、それは次のような認識に基づくものであった。

Y高校教師は、Y高校の入学生は、「男子校であるから数学が強い」と認識し、一方で国語は、同じく「男子校であるから弱い」と認識している。これらの認識が②の認識を形成していた。最後に③の認識は次のようなY高校入学生観に基づくものである。それは、Y高校生は「勉強もしたいけど部活動もしたい」という志向性を持っているというものである。このようにY高校教師が認識するのは、近隣進学高校の存在があるからである。当該高校は進学実績の面で「トップ」校であると認識され、Y高校はそれに次ぐ高校であるにとらえられている。そのような序列関係の存在を前提とし、先述したようなY高校入学生観を教師は抱いている。ゆえに、Y高校では部活動時間を十分確保することが近隣進学高校との差別化を意味し、Y高校のアイデンティティの源泉ともなっている。

以上、本研究では、授業時間配分という組織構造の一側面が教師の多様な認識構造によって形成されていることを示していく。一見すると教育課程編成に対する学校の裁量は少ないと思われがちだが、組織成員である教師は、わずかな時間配分の違いに固有の認識構造を強く反映し、時間配分を決定をしていくのである。本研究を通して、教師の認識を起点とした組織の形成メカニズムに関するミクロレベルアプローチの有効性を示していく。

#### 【引用文献】

- 荒牧草平・山村滋, 2006, 「高等学校のカリキュラムにおける構造的特徴の編成傾向とその地域的多様性」『群馬大学教育学部紀要、人文・社会科学編』第55集, pp.317-335.
- 西尾克明・南澤伸之・山崎保寿, 2001, 「総合的な学習の時間のカリキュラム開発を促進する条件—高等学校における普通科進学校と専門高校の事例分析を通して」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究』No.2, pp.77-86.
- 富田知世, 2014, 「公立進学高校の授業時間配分と正当性—東北地方X高校の総合的な学習の時間導入をめぐる教師の認識に着目して」『子ども社会研究』20号, pp.17-30.